スポーツ人類学専門分科会研究活動の回顧と展望

寒川 恒夫

Review on research activities of the Sport Anthropology Section of JSPHSS

Tsuneo Sogawa

Key words : perspectives

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 50: 235-241, March, 2005)

キーワード：研究史

I はじめに

スポーツ人類学専門分科会は、1988年10月2日に福島大学で開かれた日本体育学会第39回大会総会において設置が承認された。以来、今日に至る16年間の活動は、これを、1) 学会大会における一般研究発表・シンポジウム・キーノートレクチャー、2) 合同フィールドワーク、3) 国際学術会議、4) 専門分科会誌『スポーツ人類学研究』の発行、に分けられる。

これら4つの活動がどのような内容であったのか、その具体を記すことから始めよう。

II 学会大会における活動

1) 学会大会時の一般研究発表は、以下のテーマのものであった。

・第40回大会（1989年）

タイ舞踊の構造と技法に関する研究—プレン・チャー・プレン・レウの女型を中心に—。神がかり舞踊の運動表現—山口県阿武郡吉部野下の「厄

神舞」を事例として—。ヒマラヤの王国・ラマ僧の舞。祭礼競技—船競漕（I）—山口県北浦地域—。バスク地方の民族スポーツに関する研究。オリンピック競技成績の地域別比較—特にヨーロッパ地域を中心として—。「民族競技」としての「綱引」の事例研究—鹿児島県薩摩郡甕島列島を中心として—。二風谷アイヌの夏の遊び—エスノ・サイエンスの立場から—。大門の伝承相撲—運営組織にみる2つの系統—。ケニアの学校体育。タイ人と日本人の投能力の比較研究—タイ東北地域（ウボンラチャタニー県）における発育・発達調査第12報—。生活の都市化と子どものスポーツ遊びについて—タイ国ウボン県を事例として—。浅草オペラから浅草レビューへの変遷における舞踊性と身体性。アフリカの舞踊地図作成試論。・第41回大会（1990年）

アジア亜大陸におけるラマルのサイコロ起原説について。モヘンジョ＝ダロにおける水中活動について。アフガニスタンの騎馬競技について。約婚球戯から投綉球へ—中国民族スポーツの変容事例—。鳥取県三朝の綱引き行事。「エンピツまわし」の研究—伝播の条件—。祭礼競技—船競漕（II）—壱岐勝本浦を中心に—。民俗芸能と伝承。

早稲田大学スポーツ科学部
〒359-1164 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
連絡先 寒川恒夫

School of Sport Sciences, Waseda University
2-579-15, Mikajima, Tokorozawa, Saitama, 359-1164,
Japan
Corresponding author sogawa@waseda.jp

ダンス・ホールのダンサーに関する一考察。日本の五大弁財天にみる身体観について。日本の民俗医療体系にみられる「治療体操」について—操体を一例として—。体育科授業の進め方に関する研究—海外帰国生の教育体験を通しての比較検討—。

・第42回大会（1991年）

ガンダーラの飛天にみる泳ぎ。ペルシアの古典力技。アフガニスタン北部の騎馬競技と騎馬文化。ユーゴスラヴィアのフォークダンスについて。タイ国ウボン県における伝統遊びの動態。闘鶏と中国文化。台湾山地族の健康に関する研究—Rukai族女性について—。民俗スポーツの文化領域設定の試み—クラスター分析の利用方法—。日本における伝統的『医療体術』に関する研究—調和道丹田呼吸法について—。祭礼競技（III）—新宮市御舟祭・古座町河内祭の船競漕—。「童相撲」に関する一考察—文化伝播の問題を中心として—。雪国の冬季における子どもの運動（スポーツ）遊びについて—幼児の事例調査から—。ヒトの進化過程における投擲動作の起源について。

・第43回大会（1992年）

野球の文化人類学的アプローチ。新聞記事に見る戦後の阿波踊り—演舞場の成立を中心として—。祭礼競技（IV）対馬の舟競漕—その1・競漕形態—。春祭における「鉤引き」について—鹿児島県大隈半島を中心として—。北九州地方における女相撲について—長崎県・佐賀県の場合—。能登地方における伝承相撲についての研究—唐戸山相撲を中心とする能登地方の伝承相撲の階層制について—。間之原地蔵奉納相撲の実態—1885年から1967年までの開催経費の検討を通して—。トルコの古代遺跡にみる水と身体活動。パダング族にみる健康法—ミャンマーの特異な少数民族の小村から—。タイにおける身体技法の研究（1）。習得方法からみたタイ国ウボン県における子どもの遊びの地域差。

・第44回大会（1993年）

八つ鹿踊りの鹿面に関する一考察—愛媛県城川町の八つ鹿踊りを事例として—。対馬の舟競漕—その2。舟競漕の周辺—。1920年代の軽演劇の変

遷に関する一考察—変遷の検証と男性舞踊手の事例—。韓国シャーマンの身体科学的研究—憑霊時の心身の変化を中心として—。生殖崇拜における「水」の役割。「統一」サンサ踊りの社会的構成—「地域文化の再・創出」として—。沖縄におけるエイサーの踊り手と踊りの場の相互関係について。新聞記事に見る戦後の阿波踊り—戦後の阿波踊りを支えたもの—。ユーラシア大陸の古代スキー研究・3—モンゴル国少数民族ツァータン（トゥワー）の毛皮スキーについて—。伝統遊びの国際比較。

・第45回大会（1994年）

世代別にみたタイ国ウボン県の子どもの遊びの変容。牛追いの世界観—パンブローナのエンシエロー—。戦後の阿波踊りに見られる美的構成。浅草オペラにおける女性舞踊家（振付師・ダンサー）の特性。沖縄の民族舞踊「エイサー」の構成分析—勝連町平屋敷のエイサーを事例として—。沖縄の祭祀舞踊における上肢運動の特性—本部町の「しぬぐ舞」を中心として—。全員参加型祭礼・新潟県小千谷市「片貝まつり」にみる大型花火志向とその祭礼構造。創られた伝統スポーツ—波戸の海中綱引を事例として—。

・第46回大会（1995年）

熊野・二木島の舟競漕。「ハマ投げ」に関する研究—南九州を中心として—。「なもで踊り」復元の試み—奈良県安堵町の事例を中心として—。オーストラリア柔道人のスポーツ観。トン族相撲祭の社会的機能—中国貴州省壮黎平県坑洞の口頭伝承—。1920年代の浅草の大衆文化における女性ダンサー—浅草オペラの女性ダンサーに関する一考察—。

・第47回大会（1996年）

インドネシアの「競牛レース」に関する研究。ネパールの遊戯に関する一考察。韓国ムダンの意識状態。オーストラリア柔道人のスポーツ観—その2—。イヌクジュアク・イヌイットの民族遊戯の変容。「卯之刻相撲」の構造と変化—神事相撲存続の一形態—。沖縄本島におけるエイサーの隆盛を支えるもの—民俗舞踊の変化を肯定する伝統—。牛の角突きの習俗—文化の伝統と変容の問題

一、1920年代の浅草の大衆文化における女性ダンサー—浅草レビューの女性ダンサーに関する一考察—。なもで踊りの研究—「布留社南無手踊」をめぐって—。阿波踊りの起源について。蛇綱行事にみる龍蛇神信仰とその表現—関東三地域の蛇綱行事を事例として—。瀬戸内の舟競漕—瀬戸内・芸予の権伝馬—。

・第48回大会（1997年）

越後の獅子舞—文化の伝承と変容の問題—。浅草レビューの女性ダンサーと舞踊—女性ダンサーの容姿・技術と舞踊—。琉球古典舞踊「女踊り」における上肢動作の特性—伝承言語の分析を手がかりに—。「シマの踊り」から「沖縄の踊り」へ—戦後の沖縄におけるエイサーの変化—。菊間のお供馬（その1）—賀茂競馬とお供馬の関係について—。菊間のお供馬（その2）—祭りの組織基盤—。菊間のお供馬（その3）—運営システムについて—。バスク地方のボウリング—競技特性としての「武」—。体育的価値からみた子どもの遊びの変容—タイ国ウボンラーチャターニ県における子ども遊び調査を事例として—。モンゴル相撲の技の研究。伝統競技の近代化に関する一考察—。伝統的舟競漕にみる近代化—。綱引きの構造と変容—京都府相楽郡精華町について。福岡県築上郡吉富町八幡古表神社の神相撲—。日本における葬礼相撲—地藏信仰と祖先祭祀—。

・第49回大会（1998年）

エチオピアの民族舞踊。戦後の沖縄におけるエイサーの展開—「みる／みられる」民族舞踊の普及—。映画館のアトラクションの女性ダンサーに関する一考察。伝統競技におけるバイオレンスの変容—沖縄県南風原町の綱引きを事例として—。韓国の民族スポーツに見る文化変容—全国民俗芸術競演大会を通して—。「伝統スポーツ」の歴史的背景—ハイランド・ゲームの場合—。フォークダンスサークルにおける組織と会員のネットワーク（その1）—「練馬区Kフォークダンス友の会」の組織構造を中心として—。フォークダンスサークルにおける組織と会員のネットワーク（その2）—「練馬区Kフォークダンス友の会」の会員の動向を中心として—。

・第50回大会（1999年）

セヤ川下り大会の沿革—創始者のロマン—。ドイツ伝統球技—Turnspiel—について。第1報 Turnspielの歴史。1980年代におけるタイ国子どもの伝統遊戯とスポーツ。PENCAR SILATにおける身体技法体系。アイヌの身体観に関する研究—アイヌ語基礎語彙の言語人類学的分析を通して—。「ツキ」のスポーツ人類学—民俗世界と近代スポーツの接点—。アジアの伝統芸能にみる運動表現の民族的特性—韓国仮面劇「固城五広大」の様式性と運動表現の特徴—。身体表現としての仏舞研究。わたしたちにとって「おどり」とはなにか—ICU日本民俗舞踊実技授業30年の成果—。戦後の沖縄における興奮の探求—民俗舞踊の競技化と普及の過程—。芸能の＜競争＞と＜育成＞の立場から見た阿波踊り。狂言における呼吸技法—大蔵流山本家の「附子」を中心に—。地唄舞（上方舞）の社会組織—閑崎流名取式にみる家元制度を事例として—。

・第51回大会（2000年）

文化装置としての遊び—カナダにおける宗教的少数民族フットライトの事例—。ドイツ伝統球技—Turnspiel—について。第2報 Prellball。古代エジプト・セド祭における走行儀礼に関する一考察。五島列島にみる綱引の文化変化。沖縄の民俗舞踊「エイサー」の芸態分析。京都府舞鶴市松尾寺の仏舞にみる舞踊構造。

・第52回大会（2001年）

伝統スポーツを媒介とした地域祭にみる門中アイデンティティー—韓国忠清南道唐津郡における南以興將軍崇慕祭を通して—。ナイル川流域における現代・古代レスリングについて—スーダン以北地域の現代・古代事例の比較研究—。Gret Palucca—その舞踊観・教育観に関して—。インド舞踊（パラタナーティアム）を構成しているステップとジェスチャーとの割合。「文化の伝播」から見た蹴鞠に関する一考察。子どもの遊びにみる文化化—宗教的少数民族フットライトの事例—。

・第53回大会（2002年）

ショースポーツとしての江戸時代の相撲興行についての一考察—勸進相撲と見世物女相撲の比較

から一、ムエタイのスタジアムにおける社会階層、宮崎県西都市銀鏡（しろみ）の的射（まとい）の変容について、わが国の舟競漕の現状と課題、韓民族武芸のテッキョンにみる柔道の技と理念、権力装置としての民族スポーツ—モンゴル国のナードムを事例として—、Gret Palluca—戦後の舞踊活動に関して—、バラタナーティウム（インド舞踊）のハスタ（手による表現動作）における自己組織化臨界現象—ジュティシュワラム曲におけるハスタの出現頻度とそのランクからとらえた関係—、古代ギリシャにおける葬送競技（agon epitaphios）の質的变化、アイヌ語の上肢に関する語彙にみる自然認識と分岐のイメージ—当該言語による動きの記述に関する試論—、民族スポーツの概念化、ゴトランドの民族スポーツに関わる組織の変容、多文化主義における民族スポーツの位置づけ—カナダ・アルバータ州の事例—。

・第54回大会（2003年）

日本の民話・怪談にみる化物との相撲・格闘、豊穰儀礼としての舟競漕—沖縄県西表島・祖内の事例から—、火の神祭りにおける攻防戦について—熊本県天水町小天の事例—、プユマの伝統行事にみる民族スポーツ—中華民国台湾・台北市知本の収穫祭を事例として—、スポーツ人類学専門分科会の研究状況の足跡、ナイジェリア国立劇場と国立舞踊団、日本の民俗舞踊とその教育効果—民俗舞踊を学習することによって学習者は何を得たか—、静岡県森町小國神社の十二段舞楽における「色香」の舞踊特性—演者と観客の体験を手がかりとして—、鹿児島県疱瘡踊りの表現特性—動作分析を中心として—、地域スポーツクラブの地域密着性に関する一考察—SCC（スポーツ・コミュニケーション・サークル）を事例として—、ヴァルパにみるスウェーデン本土とゴトランドの関係、エジプト・アラブ共和国上エジプト地方にみる en-nabbut について、ブンチャック・シラットの精神文化。

・第55回大会（2004年）

我が国における近代テニスの受容の特徴—男性性の鼓舞の側面について—、ムエタイの儀礼にみられる宗教と選手の立場—闘いの舞いに表れるム

エタイ選手の姿—、古代アテネのトーチレース（Lampadedromia）に関する一考察—、八重山地方ハーリーの観光化に伴う変容、台湾原住民の民族スポーツ—プユマ（卑南族）を事例として—、ナップートの持つ文化装置としての機能について、インド・ケーララ州のテイヤム Teyyam とカラリパヤット Kalarippayattu、ムカレカレにみるトゥンガナンの適応戦略。

2) 学会大会時のシンポジウムおよびキーノートレクチャーのテーマは以下のようであった。(s) はシンポジウム, (k) はキーノートレクチャーを示す。

・第40回大会（1989年）

(s) スポーツ人類学の課題と展望

・第41回大会（1990年）

(s) 綱引の人類学

・第42回大会（1991年）

(s) 相撲の人類学

(s) 舞踊の人類学

・第43回大会（1992年）

(s) 競馬の人類学

(s) 舞踊の人類学（第2）

(s) 相撲の人類学（第2）—日本の相撲の文化的多様性

・第44回大会（1993年）

(s) 舞踊の人類学（第3）—トランスと舞踊—

(s) サッカーと野球の人類学

・第45回大会（1994年）

(s) 国際スポーツ柔道の人類学—カラー柔道着の問題周辺—

(s) 舞踊の人類学（第4）—手と足の動作特性—

・第46回大会（1995年）

(s) 舞踊の人類学（第5）

(s) 国民体育大会の人類学

・第47回大会（1996年）

(k) フィールドワークの方法論

(s) 賭とスポーツの人類学

(s) 「舞」と「武」の人類学

・第48回大会（1997年）

(k) スポーツ人類学の語り方—民族誌を書

く—

- (s) スポーツとエスニシティー
- (s) 舞踊伝承の人類学—技の伝承をめぐって—
- ・第49回大会（1998年）
- (k) バスク民族スポーツのフィールドワーク
- (s) 民族スポーツの社会組織
- (s) スポーツ的身体技法
- ・第50回大会（1999年）
- (k) ダンスのフィールドワーク—その成果と還元をめぐって—
- (s) 朝鮮半島のスポーツ文化
- (共催s) 日本人とスポーツ文化
- ・第51回大会（2000年）
- (k) 子ども遊びのフィールドワーク
- (s) 植民地経験とスポーツ文化
- ・第52回大会（2001年）
- (k) インドネシア民族スポーツ研究の現状と課題
- (s) Futbolistico!：サッカーの人類学 サッカー・汀・終わらない20世紀?
- (s) 舞踊文化の伝承としての教授
- ・第53回大会（2002年）
- (k) 琉球舞踊における技法研究の課題と展望—アジア太平洋地域舞踊の比較研究のために—
- (s) 文化政策としての民族スポーツ
- ・第54回大会（2003年）
- (k) “遊び”の民族誌を書く：フィールドワークのまなざし
- (s) 民族舞踊と教育プログラム
- ・第55回大会（2004年）
- (k) アイヌ語身体名称にみる身体観—自然認識と身体の幹—
- (s) エスニック・スポーツと教育プログラム

III 合同フィールドワーク

スポーツ人類学はその主要な情報収集をフィールドワークに求めるところから、分科会ではその方法論を共有することを目的として毎年度国内と国外とにおいて合同フィールドワークを催してきた。その状況は以下の通りである。開催年月日、

調査行事名（場所）を示す。

1990年1月20・21日、祝園神社「いごもり祭」の綱引神事（京都府相楽郡精華町）

1991年11月11—18日、第4回中国少数民族伝統体育運動会（中国広西壮族自治区南寧）

1993年6月23・24日、江陵端午祭（韓国江原道江陵）

1994年6月3—5日、厳島神社大祭和船競漕オシクラゴウ（山口県萩市玉江浦）

1995年11月5—13日、第5回中国少数民族伝統体育運動会（中国雲南省昆明市）

1996年8月3・4日、八幡古表神社古式人形神相撲（福岡県築上郡吉富町）

1997年9月1—8日、バリ島民族舞踊・民族スポーツ（インドネシア共和国バリ島）

1999年1月15—17日、ヘトマト（長崎県福江市）

2001年9月7日—14日、台湾民族スポーツ（台湾台北市）

IV 国際学術会議

国際学術会議は上述した合同フィールドワークのうち海外で実施した機会に当地研究機関と共同に開催したものである。その内容は以下の通りである。開催年月日、学術会議名（開催地）を示す。

1991年11月6—8日、日中スポーツ人類学シンポジウム（中国上海市、上海体育大学）

1993年6月20・21日、日韓民族スポーツシンポジウム（韓国ソウル市、中央大学）

1995年11月5—8日、中国民族スポーツ国際会議（中国雲南省昆明市、昆明体育運動委員会）

2001年9月8—13日、第1回日中韓スポーツ人類学国際シンポジウム（台湾台北市、国立台北師範大学）

V 分科会誌

分科会による研究誌の発行は分科会設立当初から望まれていたが、諸条件が整って第1号が出版されたのは1996年度であった。誌名は『スポー

『スポーツ人類学研究』とし、論文は原著論文と研究情報とに分けて寄稿を受けつけ、いずれも編集委員会の審査を経て掲載が決定される規定であった。分科会誌の発行は、しかし、2号で終わっている。分科会員の多くが参加した独立学会「日本スポーツ人類学会」が1998年に設立され、学会誌『スポーツ人類学研究』創刊号の発行を機に、分科会誌の廃刊が分科会総会において決定されたのである。以後、分科会は日本スポーツ人類学会と、合同フィールドワークや国際会議の開催などについて情報と意見を交換する関係を有している。

VI まとめと展望

学会大会一般研究発表のテーマを通観すると、初期においては「ヒトの進化過程における投擲動作の起源について」など自然人類学的発表もおこなわれたことが知られる。これはスポーツ人類学の“人類学”をどう理解するかという根幹に関わる問題でもある。人類学は、日本語としては、それはもっぱら自然人類学を指すと理解するのが明治以来の伝統であった。しかし、人類学の原語である anthropology は anthropos (人) と logos (学) の合成語であって人に関わる総合的理解をめざしているとするいわゆる general anthropology の立場からすれば、自然人類学と文化人類学の双方を含めることになる。

スポーツ人類学専門分科会は当初 general anthropology の立場をとったものの、その後は文化人類学の性格を強めているといえよう。この状況はアメリカにおいても同様であり、1985年に The anthropology of sport を出版した Blanchard と Cheska は同書でこの点に言及している。自然人類学の中でも例えば直立二足歩行の形成過程の研究は人類の諸種の動作の進化問題と関わり、また霊長類の遊び研究は人類の遊び行動や競争行動の発生問題を導くなど、スポーツ人類学に極めて有益な示唆を与えてくれる。自然人類学の情報を文化の問題、それもスポーツと関わる文化の問題として展開する豊かな着想が待たれるのである。

一般研究発表が対象とした民族や地域について

は、相当に顕著な傾向が見えている。関係のある160件の発表のうち57%が日本であり、東アジアは8%、東南アジア・インド・中近東は19%、ヨーロッパは10%、アフリカは5%となっている。南北アメリカはカナダが数件、オセアニアはオーストラリアが数件であり、研究はその過半が日本について展開する。これは日本人研究者にとって日本国内の問題こそがより身近でより重要であるという認識に出るものであり、そうした自国文化研究傾向は日本に限ったことではない。しかしこうした地域研究は、他方において、通文化的・通地域的な比較研究を必要とする。比較によって特定地域の研究は全体の中の位置づけと、これにともなう新しい研究着想を手に入れることになるからである。全体に展望を与えるそうした比較研究の出現が今後大いに待たれるのである。

一般研究発表が扱ったテーマはさまざまであるが、競技や遊びに対し舞踊が相対的に多いのも特徴といえる。そして、そうした競技なり舞踊なりを表示するのには、それぞれの土地の人達が用いる言葉を使う場合（例えば沖縄のエイサーや鹿児島島の鉤引き）もあれば、研究者が造語する場合（例えば中国チワン族の約婚球戯）もあり、さまざまである。この場合、前者の表現はエスノサイエンスあるいはイーミックのレベル、後者の表現はエティックのレベルとして区別されるが、将来は、そうした言葉づかいが土地の人達のものか、それともヨソ者である研究者のものであるのかの峻別意識が研究者の間で共有されることになる。

加えて、イーミックとエティックの2つのレベルにおける諸表現を、種概念でなく類概念にまとめる際に、どういった言葉を用いるべきかという問題が生じる。最も簡単で最も理に適った表現はもちろん「スポーツ」であるが、「スポーツ」とは異なる（あるいはスポーツの下位概念としての）表現がスポーツ人類学専門分科会ではこれまでさまざまに試みられてきた。例えば、民族スポーツ、伝統スポーツ、民俗競技、祭礼競技、民俗スポーツ、伝統遊び、民族舞踊、民俗舞踊、祭礼舞踊などなどである。これらの表現は、それぞれに目的

をもって使用せられたものであるが、今後どういった表現を用いるべきか、あるいはどのように使い分けるべきかが分科会全体で論じられることになろう。「民族スポーツの概念化」の発表はそうした概念整理の1つの試みといえる。

スポーツ人類学がとり扱う対象は、子供の遊びや舞踊をも含めた最広義のスポーツであるが、一般研究発表では、民族的・伝統的・民俗的・伝承的・前近代的・地域限定的な形のものがもっぱら取り扱われており、これらと対立するオリンピックなど国際スポーツ（近代スポーツ）は数件を数えるばかりである。こうした状況は、スポーツ人類学は国際スポーツを扱わないとする理解を生み出すきらいがあるが、スポーツを文化として研究するというスポーツ人類学の基本的立場からすれば、時代と社会を制限せず、国際スポーツも問題になる。1974年に設立されたアメリカの対応する学会 The Association for the Anthropological Study of Play では、国際スポーツをテーマとする研究が盛んである。国際スポーツは、民族スポーツや民族舞踊と同様、フィールドワークが可能であるため、社会学とも協力しながら、その文化研究を如何に展開するかが分科会の今後の課題となろう。

一般研究発表にみる対象分析の理論モデルとして、身体技法、文化変容、文化伝播、文化領域、

エスノサイエンス、アイデンティティ、文化化、多文化主義、観光人類学など文化人類学で開発された理論モデルが多く用いられている。このことは、スポーツ人類学がスポーツ科学と人類学（とりわけ文化人類学）の学際領域であることに因むもので、人類学の研究水準と新しい理論モデルを常時意識することは極めて重要な事柄である。しかし他方で、スポーツ科学に籍をもつことは、扱う対象が単にスポーツや遊びや舞踊であるという一点で保証されるわけではなく、当然そこにはスポーツ科学に由来する理論モデルや概念の導入が要請されることになる。スポーツ科学とその前身たる体育科学・体育学の膨大な知的情報の中から如何に文化研究のための武器を創り出してゆくか、今後分科会において検討されることになろう。

スポーツ人類学専門分科会は、海外フィールドワークと国際学術会議の開催を通して、特に東アジアの国々の体育研究者と交流を重ねてきた。そうした交流の成果の1つとして、2002年に韓国スポーツ人類学会の設立を見ている。スポーツ人類学研究の国際ネットワークをどのように築いてゆくか、分科会は新しくも魅力的な課題を持つことになった。

（平成17年1月11日受付）

（平成17年2月19日受理）